

放たれて

手嶋龍一

■外交ジャーナリスト・作家

真つ青な海面に黒い小物体が円弧を描いて飛んでいった。僕とホワイトハウスを結んでいた通信機器が小さな水しぶきをあげた。幾多の重大ニュースをやりとりした携帯電話をチェサピーク湾に投げた時ほど、心からの解放感を味わったことはない。

権力の街、ワシントンD.C.で十数年に及んだ特派員生活に、こうして別れを告げた。すでに構想を温めていた一冊の本を書くため、真珠のように美しい港町セント・マイケルズにコテージを借りた。ペランダからは陸地に深く切り込んだ湾が一望でき、小型艇が行き来している。激務のなかでひそかに夢見ていた生活が始まった。

う贅沢なのだろう。「国家安全保障会議の大統領補佐官が緊急にブリーフィングをする」と、未明に呼び出されることはもうない。朝目覚めるとともにキーボードに向かうと、軽やかに指が動いていく。疲れを覚えたなら、庭伝いに拡がるプライベート・ビーチを散策し、澄んだ空気を吸い込んでまた物語の世界に戻っていく。

ランチ時になるとジープを駆って、隣の港町にでかける。ニューヨーク・タイムズを開きながら、特製のBLTを頬張り、「ああ、デビッド・サンガー支局長はまた機関銃のように記事を書いているな」と、わが身の幸せをかみしめる。午後にはまた物語を紡ぎ、夕方にはセント・マイケルズの街中を散歩する。まずミステリー専門の本屋をのぞいて店主と言葉を交

わし、葉巻と船具を扱う店のウインドウを眺めながら、古書も扱う紅茶専門店で大西洋に沈む夕陽を眺めるのが日課となった。

わが理想の暮らしにもなったひとつ致命傷があった。ああ、時間よとまれ、物語はゆっくりと進め——何度そう願ったことだろう。だが、わずか三月余りで、わが『ウルトラ・ダラー』（新潮社）は完結してしまつた。ロアルド・ダールの童話に出てくるような港町を去らねばならなかった。



人生のしがらみを捨ててさすらいの旅へ——新しい物語を書くたび、好奇心のままに知らない街に赴いて、ひとときの住人となる。こうして、海峡を見下ろす函館の石畳の街に暮らし、神戸・北野のシナゴウグがある丘の家に住んだ。海岸の岩場に天然温泉が湧き出る屋久島のたたずまいも懐かしい。

忘れがたい家を一つだけあげよう——こう問われれば、迷わずボストン郊外に建つプロバージイ・ウェイの家をあげる。ハーバード大学に歩いて通えるこの家の大家さんは、ジャマイカから夏のひと月だけ帰ってくる。吹き抜けのリビ



Ryuchi Teshima

NHKの政治部記者として首相官邸、外務省、自民党を担当。その後、ワシントン特派員としてアメリカに赴任し、冷戦の終焉に立ち会う。湾岸戦争では最前線へ。その後、ハーバード大学CFIA・国際問題研究センターに招聘される。続いてボン支局長を経てワシントン支局長を8年間にわたって務める。この間、ブッシュ大統領をはじめ、重要閣僚の単独インタビューを数多くこなした。01年9.11の同時多発テロ事件に際しては、11日間の昼夜連続の中継放送を担い、冷静で的確な報告で視聴者の圧倒的な支持を得た。05年NHKから独立し、日本で初めてのインテリジェンス小説『ウルトラ・ダラー』を発表。姉妹篇『スギハラ・ダラー』とあわせて50万部の大ヒットに。『たそがれゆく日米同盟』、『外交敗戦』、『インテリジェンスの賢者たち』は新潮文庫のロングセラーとして読み継がれている。2011年12月、最新ノンフィクション『ブラック・スワン降臨 ～9.11-3.11インテリジェンス十年戦争～』を発表。2001年同時多発テロ事件から2011年福島第一原発事故までの十年間を検証し、日米両国のリーダーシップの有りようを描き出した。21世紀、激動の東アジアにおける日本の針路を考える必読書との評価を得ている。また、慶応義塾大学教授として後進の指導にも積極的に取り組んでいる。

ングルूमに北の陽光がさんさんと注ぎ、ベッドルームの天井から青空が見渡せた。ニューイングランドの澄明な雰囲気を感じて、じつに居心地のいい家だった。そのうえ愉快的な隣人たちがいた。引越した日から、隣家の少年たちが押しかけてきた。プロバスケットボールの「セルテックス」の熱狂的ファンだった。いつかまたあの家に住みたいと思う。

百家繚乱